

海の使者

泉鏡花

青空文庫

上

何^{なに}心^{こころ}なく、背戸^{せど}の小橋^{こばし}を、向^{むか}こうの蘆^{あし}へ渡^{わた}りかけて、思^{おも}わ
ず足^{あし}を留^とめた。

不^ふ図^と、鳥^{とり}の鳴音^{なくね}がする。……いかにも優^{やさ}しい、しおらしい声^{こゑ}で、
きりきり、きりりりり。

その声^{こゑ}が、直^すぐ耳^{みみ}近^{ちか}に聞^きこえたが、ついで目^め前^{まへ}の樹^きの枝^{えだ}や、茄^な
子^す畑^{ばたけ}の垣^{かき}根^ねにした藤^{ふじ}豆^{まめ}の葉^は蔭^{かげ}ではなく、歩^{ある}行^ゆく足^{あし}許^{もと}の低^ひ
処^{ところ}。

其^{そこ}処^こで、立^たち佇^{どま}つて、ちよつと気^きを注^つけたが、もう留^やんで寂^{ひっそ}
り

する。——秋の彼岸過ぎ三時下りの、西日が薄曇った時であつた。この秋の空ながら、まだ降りそうではない。桜山の背後に、薄黒い雲は流れたが、玄武寺の峰は浅葱色に晴れ渡つて、石を伐り出した岩の膚が、中空に蒼白く、底に光を帯びて、月を宿していそうに見えた。

その麓まで見通しの、小橋の彼方は、一面の蘆で、出揃つて早や乱れかかった穂が、霧のように群立つて、藁屋を包み森を蔽つて、何物にも目を遮らせず、山々の茅薄と一連に靡いて、風はないが、さやさやと何処かで秋の暮を囁き合ふ。

その蘆の根を、折れた葉が網に組み合せた、裏づたいの畦路へ入ろうと思つて、やがて踏み出す、とまたきりりりと鳴いた。

「なんだろう」

虫ではない、確かに鳥らしく聞こえるが、やっぱり下の方で、
 どうやら橋杭はしぐいにでもいるらしかった。

「千鳥かしらん」

いや、磯でもなし、岩はなし、その留まりそうな滯みおつくし標しるしも

ない。あつたにしても、こう人ひと近く、羽を驚かさぬ理由わけはない。

汀みぎわの蘆あしに潜ひそむか、と透すかしながら、今度は心してもう一ひと歩あし。

続いて、がたがたと些ちと荒く出ると、拍子ひょうしに掛かって、きりき

りきり、きりりりり、と鳴き頻しきる。

熟じつと聞きながら、うかうかと早はや渡り果てた。

橋は、丸木を削けずつて、三、四本並べたものにすぎぬ。合せ目も

なかす
中透いて、板も朽ちたり、人通りにはほろほろと崩れて落ちる。

かたち
形ばかりの竹を縄なわから搦なげにした欄干もついた、それも膝までは高ひざ

くないのが、往ゆき還かえり何時いつもぐらぐらと動く。橋はし杭ぐいももう瘦やせ

て——潮しほ入りの小川の、なだらかにのんびりと薄墨色うすずみいろして、瀬

は愚か、流れるほどは揺れもしないのに、水に映る影は弱って、

さかさま
倒たに宿あしる蘆あしの葉とともに蹠よろ踉よろする。

が、いかに朽ちたればといて、立樹たちきの洞ほらでないものを、橋杭

に鳥は棲すむまい。馬の尾に巣ねずみくう鼠ねずみはありと聞けど。

「どうも橋らしい」

もう一度、試みに踏み直して、橋たもとの袂たもとへ乗り返すと、登あしおと音と

ともに、忽たちまち鳴き出す。

(きりきりきり、きりりりりり……)

あまり爪尖つまさきに響いたので、はっと思つて浮足で飛び退すきつた。

その時は、雛ひなの鶯うぐいすを蹂み躪にじつたようにも思つた、傷いた々いたしいばかり可憐かれんな声かな。

確かに今乗つた下らしいから、また葉を分けて……ちようど二、三日前、激しく雨水の落とした後の、汀あとが崩れて、草の根のまだ白い泥土どろつちの欠目かけめから、楔くさびの弛ゆるんだ、洪水でみずの引いた天井裏見るよ
うな、横木よこぎと橋板はしいたとの暗い中を見たが何もおらぬ。……顔を倒
にして、捻ねじ向いて覗のぞいたが、ト真赤な蟹かにが、ざわざわと動いた
ばかり。やどかりはうようよ数珠形じゆずなりに、其処そこら暗い処ところうごめ
が、声のありそうなものは形もなかった。

手を払って、

「ははあ、岡沙魚おかはぜが鳴くんだ」

と独りで笑った。

中

虎沙魚とらはぜ、衣沙魚ころもはぜ、ダボ沙魚はぜも名にあるが、岡沙魚と言うのがあろうか、あつても鳴くかどうか、覚束おぼつかない。

けれどもその時、ただ何なんとなくそう思った。

久しい後あとで、その頃薬研堀やげんぼりにいた友だちと二人で、木場きばから八幡様はちまんさまへ詣まいって、汐入町しおいりちようを土手どてへ出て、永代えいたいへ引つ返し

たことがある。それも秋で、土手を通つたのは黄昏時、果てしのない一面の蘆原は、ただ見る水のない雲で、对方は雲のない海である。路には処々、葉の落ちた雑樹が、乏しい粗朶のごとく疎に散らかつて見えた。

「こういう時、こんな処へは岡沙魚というのが出て遊ぶ」と渠は言つた。

「岡沙魚つてなんだろう」と私が聞いた。

「陸に棲む沙魚なんです。蘆の根から這い上がつて、其処らへ樹上りをする……性が魚だからね、あまり高くは不可ません。猫柳の枝なぞに、ちよんと留まつて澄ましている。人の蹠音がするとね、ひっそりと、飛んで隠れるんです……この土手の名物

だよ。……劫こうの経た奴やつは鳴くとさ」

「なんだか化ばけそうだね」

「いずれ怪けし性しょうのものです。ちよいと気味の悪いものだよ」

で、なんとなく、お伽とぎ話ばなしを聞くようで、黄たそ昏がれのものの気け

勢はいが胸むねに染しみた。——なるほど、そんなものも居いそうに思おもって、

ほぼその色も、黒の処ところへ黄き味みがかって、ヒヤリとしたものらしく

考かんえた。

後あとで拵こしらえ言ごと、と分わかったが、何なぜ故ゆか、ありそうにも思おもわれる。

それが鳴く……と独ひとりで可お笑かしい。

もう、一度、今度は両手に両側の蘆あしを取とって、ぶら下ぶらるように
して、橋の片端ひょうしを拍ひ子しに掛かけて、トトンと遣やる、キキイと鳴なる、ト

ントン、きりりと鳴く。

(きりりりり、

きり、から、きい、から、

きりりりり、きいから、きいから、)

くれない
紅の綱で曳く、玉の轆轤が、黄金の井の底に響く音。

「ああ、橋板が、きしむんだ。削ったら、名器の琴になろうも

しれぬ」

そこで、欄干を掻い擦った、この楽器に別れて、散策の畦を
行く。

と蘆の中に池……というが、やがて十坪ばかりの窪地がある。

汐が上げて来た時ばかり、水を湛えて、真水には干て了う。池の

周囲^{まわり}はおどろおどろと蘆^{あし}の葉^はが おおわらわ 大童^{おほなご}で、 まんなかどころ 真中^{まんなか}所^{どころ}、 かつば 河童^{かづま}の
 皿^わにぴちやぴちやと水を溜^ためて、其^{その}処^{ところ}を、 ひがた 干潟^{ひがた}に取り残^{のこ}された小^こ
 魚^{うお}の泳^{およ}ぐのが不^ふ断^{だん}であるから、村^{むら}の小^こ児^{ども}が袖^{そで}を結^ゆつて水^{みづ}悪^{いたずら}戯^{ずら}に
 掻^かき廻^{まわ}す。……やどかりも、うようよいいる。が、真^ま夏^{なつ}などは暫^{しばら}
 時^{とき}の汐^{しほ}の絶^たえ間^まにも乾^かき果^はてる、壁^かのよう^{よう}に固^{かた}まり着^きいて、 いなずま 稻^{いな}妻^{ずま}
 の亀^{ひび}裂^ひが入^{はい}る。さつと一^{ひと}汐^{しほ}、 たごえがわ 田^た越^こ川^{がわ}へ上^あげて来^きると、じゅ
 うと水^{みづ}が染^そみて、その破^やれ目^めにぶつぶつ泡^{あわ}立^だつて、やがて、満^み々^ず
 と水^{みづ}を湛^たえる。

汐^{しほ}が入^{はい}ると、さて、さすがに濡^ぬれずには越^こせないから、 ここ 此^こ処^こに
 も一つ、—— さき 以前^{さき}の橋^{はし}とは間^あわい十^{けん}間^{げん}とは隔^へたらぬに、 へだ 又^{また}橋^{はし}を渡^わし
 てある。これはまた、 わす 纔^{わす}かに板^{いた}を持^もつて来^きて、投^なげたにすぎぬ。

池のつづまる、この板を置いた切れ口は、ものの五歩はない。
 水は川から灌いで、橋を抜ける、と土手形の畦に沿って、蘆の根
 へ染み込むように、何処となく隠れて、田の畦へと落ちて行く。
 今、汐時で、薄く一面に水がかかっていた。が、水よりは蘆
 の葉の影が濃かった。

今日は、無意味では此処が渡れぬ、後の橋が鳴ったから。待て、
 これは唄おうもしれない。

と踏み掛けて、二足ばかり、板の半ばで、立ち停ったが、何
 にも聞こえぬ。固より聞こうとしたほどでもなしに、何となく夕
 暮の静かな水の音が身に染みる。

岩端や、ここにも一人、と、納涼台に掛けたように、其処

に居て、さして来る汐を視めて少時経った。

下

水の面とすれすれに、むらむらと動くものあり。何か影のように浮いて行く。……はじめは蘆の葉に縫った蟹が映つて、流るる水に漾うのであろう、と見たが、あらず、然も心あるもののごとく、橋に沿うて行きつ戻りつする。さしたての潮が澄んでいるから差し覗くとよく分かった——幼児の拳ほどで、ふわふわと泡を束ねた形。取り留めのなさは、ちぎれ雲が大空から影を落としたか、と視められ、ぬぺりとして、ふうわり軽い。全体が薄

樺ばで、黄色い斑ふちがむらむらして、流れのままに出たり、消えたり、結んだり、解けたり、どんよりと濁にごり肉じしの、半ば、水なりに透き通るのは、是これなん、別のものではない、虎とら斑まだらの海月くらげである。

生しやうある一物いちもつ、不思議はないが、いや、快たわむく戯むれる。自在に動く。……が、底ともなく、中なかほどともなく、上うわ面つらともなく、一ひ条とすじ、流れの薄うすぎぬ衣かつを被かいで、ふらふら、ふらふら、……斜はすに伸びて流るるかと思えば、むっくり真直まぢくに頭ずを立てる、と見ると横になつて、すいと通る。

時に、他ほかに浮うんだものはなんにもない。

この池を独ひとりり占じめ、得意ていの体ていで、目も耳もない所せ為いか、熟じつと視

める人の顔の映った上を、ふい、と勝手に泳いで通る、通る、と引き返してまた横切る。

それがまた思うばかりではなかつた。実際、其処しやがに踞しゃがんだ、胸はまの幅ただ、唯、一尺ばかりの間あいだを、故わざとらしく泳ぎ廻まわつて、これ見よがしの、ぬっぺらぼう！

憎にくい気がする。

と膝ひざを割ひつて衝つと手を突つツ込む、と水がさらさらと腕かひなに搦からんで、一いち来らい法師ほうし、さしつらりひで、ついと退ひいた、影たも溜たまらず。腕うでを伸ばしても届かぬ向こうで、くるりと廻まわる風ふうして、澄あましてまた泳ぐ。

「此奴こいつ」

と思わず眩つぶやいて苦笑した。

「待てよ」

獲物えものを、と立って橋の詰つめへ寄って行く、とふわふわと着いて来て、板と蘆あしの根の行き逢ゆった隅すみへ、足近く、ついと来たが、蟹かにの穴か、蘆の根か、ぶくぶく白泡しろあわが立ったのを、ひよい、と気なしに被かぶつたらしい。

ふツ、と言いいそうなその容体ようだい。泡を払うがごとく、むくりと浮ういて出た。

その内うち、一ひと本根から断きつて、逆手さかてに取とつたが、くなくなした奴やつ、胴中どうなかを巻まいて水分すいぶんかれをさして遣やれ。

で、密そつと離はなれた処ところから突つ込んで、横寄よこよせに、そろりと寄せて、

這奴しやつが夢中で泳ぐ処を、すいと掻かきあげると、つるりと懸かかった。
 蓴菜じゆんさいが搦からんだようにみえたが、上へ引く雫しずくとともに、つる
 つるとすべつて、もう何なんにもなかつた。

「鮫たこの燐火ひのだま、退散たいさんだ」

それみる、と何か早やや、勝ち誇かつた氣構きがまえして、蘆あしの穂ほを頼摺ほぼず
 りに、と弓杖ゆんづえをついた処は可よかつたが、同時に目の着うしおく潮うしおのさ
 し口。

川から、さらさらと押して来る、蘆あしの根ねの、約二間けんばかりの切
 れ目の真中まんなか。橋と正面に向き合あう処ところに、くるくると渦うずを巻まいて、
 坊主ぼうずめ、色も濃くわつく赫くわつと赤あからんで見えるまで、躍おどり上がる勢いきほいで、
 むくむく浮うき上がった。

ああ、人間に恐れをなして、其処そこから、川筋を乗って海へ落ち行くゆよ、と思う、と違ちがう。

しばらく同じ処ところに影を練ねって、浮ういつ沈しみつしていたが、やがて、すすい、横泳よぎで、しかし用心深こころそうな態度で、蘆あしの根ねづたいに大廻おほりに、ひらひらと引き返かえす。

穂ほは白く、葉はの中に暗くなつて、黄たそがれ昏くれの色いろは、うらがれかかつた草くさの葉末はに敷しき詰めめた。

海月くらげに黒い影かげが添そって、水みづを捌さばく輪りんが大きおほくなる。

そして動うごくに連つれて、潮しほはしだいに増ふすようである。水みの面もが、水みづの面もが、脈みやくを打うって、ずんずん拡ひろがる。嵩かさ増ます潮しほは、さし口ぐちを挟はさんで、川かべりの蘆あしの根ねを揺ゆすぶる、……ゆらゆら揺ゆすぶる。一ひ

揺り揺れて、ざわざわと動くごとに、池は底から浮き上がるものに見えて、しだいに水は増して来た。映る影は人も橋も深く沈んだ。早や、これでは、玄武寺を倒に投げうつても、峰は水底に支えまい。

蘆のまわりに、円く拡がり、大洋の潮を取つて、穂先に滝津瀬、水筋の高くなり行く川面から灌ぎ込むのが、一揉み揉んで、どうと落ちる……一方口のはけ路なれば、橋の下は颯々と瀬になつて、畦に突き当たつて渦を巻くと、其処の蘆は、裏を乱して、ぐるぐると舞うに連れて、穂綿が、はらはらと薄暮あいを蒼く飛んだ。

(さつ、さつ、さつ、

しゅっ、しゅっ、しゅっ、

エイさ、エイさ！）

と矢声やごえを懸けて、潮しおを射て駈かけるがごとく、水の声が聞きなされる。と見ると、竜宮の松たいまつ火を灯ともしたように、彼の身体からだがどんよりと光を放った。

白い炎が、影もなく橋にぴたりと寄せた時、水が穂かぶに被かぶるばかりに見えた。

ぴたぴたと板が鳴って、足がぐらぐらとしたので私わたしは飛び退のいた。土に下りると、はや其処そこに水があつた。

橋がだぶりと動いた、と思うと、海月は、むくむくと泳ぎ上がった。水はしだいに溢あふれて、光ひかりもの物は衝つ々と尾びを曳ひく。

この動物は、風の腥なまぐさい夜よに、空そらを飛んで人を襲うと聞いた……
 暴風雨あらしの沖には、海坊主うみぼうずにも化ばけるであろう。

逢魔おうまケ時ときを、慌あわただしく引き返して、旧来もとた橋へ乗る、と、

(きりりりり)

と鳴った。この橋はやや高いから、船に乗った心地こころちして、まず
 意こころを安んじたが、振り返ると、もうこれたもとも袂しおまで潮が来て、海月
 はひたひたと詰め寄せた。が、さすがに、ぶくぶくと其処あだびかりで留つ
 た、そして、泡が呼吸いきをするような仇あだびかり光かりで、

(さっさっさっ)

しゅっしゅっ、

さっ、さっ！)

と曳えい々えい声ごえで、水みづを押し上げようと努力つとむする気勢けはい。
玄武寺げんむじの頂たかねなる砥とのごとき巖いわの面おもへ、月影いづみかげが颯さつとさした。

—

青空文庫情報

底本：「高野聖」集英社文庫、集英社

1992（平成4）年12月20日第1刷発行

1993（平成5）年6月5日第2刷発行

初出：「文章世界」

1909（明治42）年7月

※修正箇所は「鏡花全集 卷十二」（岩波書店、1942）を参照しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2008年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海の使者

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>